

Title	ロンサールと『戯歌(ざれうた)集』 : その匿名の問題について
Author(s)	岩根, 久
Citation	Gallia. 40 P.27-P.33
Issue Date	2001-03-10
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/3820">http://hdl.handle.net/11094/3820</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## ロンサールと『<sup>ざれうた</sup>戯歌集』 その匿名の問題について

岩根 久

人の間と書いて人間と読むが、人には男女がある。そして、男女間のことは古来より人の思考の一部を占め続けており、表現され続けている。ギリシャ神話では神々の話を初めとして例に漏れず、また聖書では、男女間のことが人間の歴史の契機となる。そのことを抜きにして文学は成立しないとすら言えるであろう。その描写のアプローチについて大雑把に二元論的に言えば、精神的な描写のアプローチと肉体的な描写のアプローチがある<sup>1)</sup>。それらは基本的にどっちが上でもどっちが下でもない。

詩という表現手段をもって、あらゆるテーマに取り組みもうとしたロンサールにおいても、恋愛という男女（とは限らないが）間の普遍的テーマに上述の両側面からのアプローチ（実際にはさらに多角的なのであるが）は当然のことであったと言えよう。

1550年に『頌歌四部集・叢林集』<sup>2)</sup>、1552年に『恋愛詩集・頌歌集第五部』<sup>3)</sup>（以降『恋愛詩集』と略称する）を出版し、当時の詩壇において地歩を確立したロンサールは、1553年、匿名で『<sup>ざれうた</sup>戯歌集』<sup>4)</sup>を出版する。それに続いて、古典学者のミュレが註釈をつけた『恋愛詩集』増補改訂版<sup>5)</sup>、『頌歌集第五部』増補版<sup>6)</sup>とこの年の出版は多彩である。

この論考で取り上げようとしているのは、1552年の9月の『恋愛詩集』と1553年の5月の『恋愛詩集』増補改訂版との間にはさまれて出版された匿名の詩集

ロンサールのテキストおよび註釈の引用については、以下の略称を用いた。

*Laum* : Pierre de Ronsard, *Œuvres complètes...*, éd. critique par Paul Laumonier, révisée et complétée par I. Silver et R. Lebègue, [publiée par la] Société des textes français modernes, Paris, Hachette, puis Droz, puis M. Didier, 1914-1975.

*PL* : Pierre de Ronsard, *Œuvres Complètes*, éd. établie, présentée et annotée par Jean Céard, D. Ménager, M. Simonin, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993-94, 2 vol.

*Genre* : Pierre de Ronsard, *Les amours et Les folastries* : 1552-1560, éd. établie, présentée et annotée par André Genre, Paris, Librairie générale française, « Le livre de poche », 1993.

- 1) もちろん、この切り分け方は便宜上のものである。取り扱う主題によっては、西洋文学なら、聖と俗、国文学なら雅と俗というような別の切り分け方も当然すぐに思いつくであろう。
- 2) *Les Quatre Premiers Livres des Odes [...]. Ensemble son Bocage*, Paris, Guillaume Cavellat, 1550.
- 3) *Les Amours [...]. Ensemble le Cinquième de ses Odes*, Paris, veuve Maurice de la Porte, 1552.
- 4) *Livret de folastries. A Ianot Parisien. Plus, quelques Epigrammes grecs : et des Dithyrambes chantées au Bouc de E. Iodèle, Poète Tragique*, Paris, veuve Maurice de la Porte, 1553.
- 5) *Les Amours [...], nouvellement augmentées par lui, et commentées par Marc Antoine de Muret. Plus quelques Odes de L'Auteur, non encore imprimées*, Paris, veuve Maurice de la Porte, 1553.
- 6) *Le Cinquième des Odes [...] augmenté. Ensemble La Harangue [...]*, Paris, veuve Maurice de la Porte, 1553.

『戯歌集』(同年4月)である<sup>7)</sup>。ロンサール研究の現状からすれば、『戯歌集』が研究されていない訳でも、正当に評価されていないわけでもない。ロンサールの学術的研究の端緒を開いた碩学ローモニエがページを割いているのを初めとし<sup>8)</sup>、最近では、アンドレ・ジャンドルが最新の版を出し、非常に精密に註釈を施している<sup>9)</sup>。そして『戯歌集』が、『恋愛詩集』を補完し対をなすことも、その匿名性が世の中の非難から逃れるためのものでないことも明らかになっている。この論考ではこの匿名の問題についてさらに考えてみたい。

『戯歌集』は、いわゆる「放埒な(libre)」作品を含んでいる。たとえば、この作品集の最後に位置する作品中ただ二つのソネ「突くすべも、湿らすすべも知る金の穂先の槍よ<sup>10)</sup>」と「汝を讃えん、朱なる割れ目よ<sup>11)</sup>」の2編(片方は« SONET » もう一方は« L.M.F<sup>12)</sup> »と題されている)は対をなす構成になっており、豊饒を言祝ぐ護符の呪と見なせるが、その放埒さは言うべくもない。この二つの作品と「出ぬ屍は万苦の死を味わわせる」というニカルコスのエピグラムの仏訳(« [Épigramme] XIII »)は、「娼婦カタン之歌」(« Folastrie III »)、「酔っぱらいトゥノ之歌」(« Folastrie VIII »)、「ディオニュソス賛歌」(« Dithyrambes à la Pompe du Bouc de Jodëlle, Poète Tragiq »)と共に、他の作品とは異なりロンサールの名を冠した作品集からは放擲されることとなる。『恋愛詩集』と比べるまでもなく、同じ作者の筆になるとも思えぬ放埒な作風により、この作品集(作者ではない!)および後世の好事家によるその再版は迫害を受けることになる<sup>13)</sup>。

ロンサールは、生前に6度自らの『総作品集』(1560、1567、1571、1572-73、1578、1584)を出版するが、これらはすべて詩の選択、配置等、詩人が綿密に意図して行ったものである<sup>14)</sup>。さて、第1次総作品集から、詩人の遺書ともいう

7) 当時の慣例で出版物に付帯している出版特許状の写し(extrait du privilège)によれば、『恋愛詩集』は1552年9月6日、『戯歌(ざれうた)集』は1553年4月19日、『恋愛詩集』増補改訂版は同年5月18日に出版特許状が出ていることがわかる。

8) Paul Laumonier, *Ronsard, poète lyrique, étude historique et littéraire*, Paris, Hachette, 1932, (réimpr., Genève, Slatkine Reprints, 1972). 3<sup>e</sup> éd., p.93 sqq.

9) *Genre*, pp.243-317, pp.503-526.

10) Lance au bout d'or qui sais & poindre & oindre, / De qui jamais la roideur ne default, / Quand en camp clos bras à bras il me faut / Toutes les nuis au doux combat me joindre. / Lance vraiment qui ne fus jamais moindre / A ton dernier qu'à ton premier assaut, / De qui le bout bravement dressé haut / Est toujours prest de choquer & de poindre. / Sans toi le Monde un Chaos se feroit, / Nature manque inabile seroit / Sans tes combas d'accomplir ses offices: / Donq, si tu es l'instrument de bon heur / Par qui lon vit, combien à ton honneur / Doit on de vœus, combien de sacrifices? (*Laum*, V, p.92; *PL*, I, p.571; *Genre*, pp.316-317)

11) Je te salue o vermeillette fante, / Qui vivement entre ces flancs reluis: / Je te salue o bienheureé pertuis, / Qui rens ma vie heureusement contante. / C'est toi qui fais que plus ne me tourmente / L'archer volant, qui causoit mes ennuis. / T'aiant tenu seulement quatre nuis, / Je sens sa force en moi desja plus lente. / O petit trou, trou mignard, trou velu, / D'un poil folet mollement crespelu, / Qui à ton gré domtes les plus rebelles, / Tous vers galans devoient pour t'honorer / A beaux genous te venir adorer, / Tenans au poin leurs flambantes chandelles. (*Laum*, V, pp.92-93; *PL*, I, p.571; *Genre*, p.317)

12) L.M.F.についての註だが、面白いことに*PL*では、「Le mesme féminin」、*Genre*では「La Motte Féminine」となっている。二つのソネの対象構造からしても、*PL*が正しいように思う。

13) *PL*, pp.1460-1461 参照。

14) ロンサールが自らの作品の改訂に心血を注いだことは、Louis Terreaux, *Ronsard, correcteur de*

べき死の1年前にあたる1584年に出版された第6次『綜合作品集』に至るまでこの匿名の『戯歌集』から若干の削除改編を経ながらいくつかの作品が収録され続けている。このことから、自らが『戯歌集』の著者であるということを知れるのをさほど厭っていないことが伺えるが、それだけではない。彼が全ての綜合作品集から外した「ディオニュソス賛歌」についてさえ、そこで歌われている「ジョデルの山羊」について、宗教戦争のさなかプロテスタント側から攻撃をうけるや、その防衛にまわっているのである<sup>15)</sup>。後の話を出すまでもなく、出版当時をとってみても、『恋愛詩集』と同じ版元から出版し、かつ、かくまでギリシャ文学についての造詣を駆使した作品を創出し得る詩人を読者は他に想像し得たであろうか。『恋愛詩集』にせよ、『戯歌集』にせよ、それなりの教養をもった狭い読者層しか持たなかったのだから。

ここで、『戯歌集』の構成を見てみよう。巻頭のパリのジャンノ（ジャン＝アントワーヌ・ド・パイフであろうと推定される<sup>16)</sup>）への献呈歌、8作品から成る「戯れ歌」、ディオニュソス賛歌、17作品から成る「翻訳エピグラム」、巻末の両ソネ、に亘るそれぞれの作品の音綴数と行数は以下の通りである。

A Janot Parisien		8 syl.	30 v.
Folastries	Première Folastrie	7 syl.	222 v.
	Folastrie II	7 syl.	88 v.
	Folastrie III	8 syl.	174 v.
	Folastrie IIIII	8 syl.	108 v.
	Folastrie V	8 syl.	58 v.
	Folastrie VI	7 syl.	68 v.
	Folastrie VII	8 syl.	90 v.
	Folastrie VIII	8 syl.	125 v.
Dithyrambes à la pompe du Bouc de Jodelle		1-12 syl.	395 v.
Traduction de quelques	I Du grec de Posidippe	10 syl.	22 v.
épigrammes grecz à Marc	II Du grec d'Anacréon	7 syl.	24 v.
Antoine de Muret	III [Anonyme, Anacréon?]	7 syl.	4 v.
	IV Du grec d'Automédon	8 syl.	12 v.
	V [Anonyme]	7 et 3 syl.	6 v.
	VI [Anonyme]	12 syl.	4v.
	VII Du grec de Lucil	7 syl.	4 v.

*ses œuvres. Les variantes des Odes et des deux premiers livres des Amours*, Genève, Droz, 1968. によって綿密に跡づけられているが、拙稿「ロンサールの『論説詩集』と出版」、『ロンサール研究』, XI, 1998, pp.1-14、および、「詩と死と癒し ピエール・ド・ロンサールの場合」, 『人文研究』(大阪医科大学), No.31, 2000年, pp.74-91、も参照のこと。

15) Jacques Pineaux, *La polémique protestante contre Ronsard*, éd. des textes avec introduction et notes, [publiée par la] Société des textes français modernes, Paris, Didier, 1973. 及び Ronsard, *Réponse aux Injures [...]*, Gabriel Buon, Paris, 1563, v.463-488. (*Laum*, XI, p.141-142) 参照。

16) *Laum*, V, p.3 ; *PL*, I, p.1450 ; *Genre*, p.245 参照。

	VIII De Palladas	8 syl.	4 v.
	IX De Ammian	8 syl.	8 v.
	X De Nicarche	10 syl.	12 v.
	XI De Palladas	8 syl.	12 v.
	XII Du Mesme	8 syl.	12 v.
	XIII De Nicarche	7 syl.	8 v.
	XIV De Lucil	8 syl.	6 v.
	XV [Anonyme] Du nés de Dimanche	8 syl.	14 v.
	XVI De Posidippe Sur l'Image du Temps	12 syl.	14 v.
	XVII [Anonyme]	12 syl.	8 v.
[Sonnets]	Sonet	10 syl.	14 v.
	L.M.F.	10 syl.	14 v.

まず、各作品が誰に献呈されているかという点に注目しよう。この作品集の巻頭詩は仲間であるパイフに捧げられ（巻頭詩で、この作品集全体がパイフに捧げられていることが述べられる）、また、「ディオニュソス賛歌」もこれもまた仲間であるエチエンヌ・ジョデルに捧げられ、そして翻訳詩は、1ヶ月後に出版されることになる『恋愛詩集』増補改訂版の註釈者である古典学者のミュレに捧げられている。つまり、献呈を受けている人物達は、いわばその時点での「ロンサールのサークル」のメンバーであると言える。なかでも、パイフ、ジョデルは後にプレイアッド詩派と称される詩人達の中の不動の五人（ロンサール、デュ・ベレー、パイフ、チャール、ジョデル）の構成員でもある。

さらに、この作品の配置を見ると、「ディオニュソス賛歌」（« Dithyrambes à la Pompe du Bouc de Jodèle, Poète Tragiq »）がこの作品集の中心に据えられていることがわかる。つまり、「ディオニュソス賛歌」が « Folastries » という作品群と、『ギリシャ詞華集』（*Anthologie Grecque*）からのエピグラム翻訳作品群の間に位置し、作品集を二分している。内容的に見ると、前半の « Folastries » 作品群の内容は同時代の俗事であり、後半はギリシャの詩人達のエピグラム、すなわち機知によって現実を斜めに見、常識を覆す思考に満ちた作品の翻訳である。また、「ディオニュソス賛歌」は、音綴から見ても特異である。この詩は1音綴から12音綴にまでわたる異音綴を自在に駆使したまさに狂乱の詩である。この悪ふざけとも言える狂乱はどこから来るのだろうか。

ここで出版の時期に注目してみよう。この作品集が出版された1553年4月といえば、年も改まり<sup>17)</sup>、心浮き立つ春の季節である。ロンサールは初の恋愛詩集で

17) というのは当時カトリック圏ではAnnonciation（3月25日）を年の変わり目とする暦を用いていたからである。フランスでは大法官ミシェル・ド・ロビタルの助言により1563年にシャルル9世が年の始めを1月1日とする布告を出すのが、教会の抵抗に遭う（cf. Jean-Paul Parisot et Françoise Suagher, *Calendriers et chronologies*, Paris ; Milan ; Barcelone, Masson, 1996, pp. 76-77.）。断るまでもないことだが、本論考においても慣例通り、1563年以前の年号に言及するときであっても1月1日を年始とする新暦を用いる。

ある『恋愛詩集』を完成し、以前より対立していた宮廷第一詩人のメラン・ド・サン＝ジュレとの和解も成り立ち、ミュレとの共同作業による『恋愛詩集』増補改訂版もまさに出版を待っているのみである。ロンサルは詩人としての生涯の最高の出発点に立っている<sup>18)</sup>。パイフもロンサルより遅れること3ヶ月、1552年12月に『恋愛詩集』を出版し<sup>19)</sup>、またジョデルは、戯曲『クレオパトラ』上演が成功を博し、ロンサルを初めとする仲間達が2月に「ディオニュソス賛歌」のモデルとなったとされる祝賀会をとりおこなっている。この頃、諧謔の大知識人ラブレーが亡くなっており、追悼の宴という意味合いもあろう<sup>20)</sup>。作品集自体の名前もいかにもそうであるが、『戯歌集』<sup>せうた</sup>にただよう祝祭的な悪ふざけの雰囲気は、こうした状況を雄弁に物語っている。

しかし、このディオニュソス的な様相とは逆に、巻頭の詩でムーサを導いているのがアポロンであることを示すことによって<sup>21)</sup>、この作品集全体が「知」に裏付けられたものであることを明かしている。また、この作品集のタイトルページに記されたカトゥッルス「というのも、詩人自身が貞淑であるべきことは尤もなことだが、詩の方は全くそんな必要はないのだから<sup>22)</sup>」というラテン語の銘、およびカトゥッルスを模した巻頭詩<sup>23)</sup>からも、「カトゥッルスを念頭においてこの詩を読んでくれよ」というメッセージを読みとることができる。また、俗事を描いた「Folastries」作品集を『ギリシャ詞華集』の翻訳と対称の位置におくことによって、「詩がいかに下品な様相を呈そうとも、ギリシャの知に裏打ちされているのだ」ということを配置によって暗示している。以上のことは、他の読者はともかく仲間内では重々承知のことであるはずである。

これらことから逆にいえば、当時ロンサルを知る者にとっては、この作品集がロンサルのものであり、ロンサル自身もそのことを隠す必要などまったくなかったといえよう。この作品集は舞台裏を知る限られた人たちだけの書物であり、この書物自体に敢えて名を冠して後世に残す必要がなかったものと考えられる。必要がないというよりもむしろ、自らの詩の源泉の謎解きとなるようなこの作品集は、はっきりと「楽屋ネタ」的なものとして、仲間だけの楽しみとなる作品集だったのである。だが、今述べた1553年4月に出版された書物自体の匿名性と、作品の匿名性は切り離して考えなければならない。先に述べたように書物の

18) このあたりの事情については、Michel Dassonville, *Ronsard, étude historique et littéraire*, Genève, Droz, t. III, 1976, p.75 sqq. 及び、Michel Simonin, *Pierre de Ronsard*, Paris, Fayard, 1990, p.143 sqq. 参照。

19) *Les Amours de Ian Antoine de Baif*, Paris, veuve Maurice de la Porte, 1552. ジャン＝ポール・バルビエは、ロンサルとパイフが相互に両者の『恋愛詩集』の草稿を見せ合ったであろうとまで推測している (Jean-Paul Barbier, *Ma bibliothèque poétique. Troisième partie. Ceux de la Pleiade*, Genève, Droz, 1994, p.303.)。

20) ジャンドルは、「酔っぱらいトゥノの歌」(「Folastrie VIII」)にラブレーの死を読み取っている (*Genève*, p.37)。

21) « Apollon le guidedance » (*Laum*, V, p.5, v.22)。

22) « Nam castum esse decet pium poetam / Ipsum, versiculos nihil necesse est. / Catul. » (*Laum*, V, p.1). これは « Pedicabo ego vos, et irrumabo, ... » (Catullus, *Carmina*, XVI) からの引用である。

23) « A qui donnai-je ces sonnettes, ... » (*Laum*, V, p.3)、および、「Cui dono lepidum novum libellum, ... » v.1 (Catullus, *Carmina*, I) 参照。

中の作品は、捨てるべきものは捨て、拾うべきものは拾われて最終的にはロンサール生前最後の作品集である1584年の第6次『綜合作品集』の「逸楽集 (Gayetez)」という部立の内に収録されている。では、ロンサールは捨てられた作品には何の未練も愛着も感じていなかったのであろうか。奇しくも1584年に版元も明示されていない『戯歌集』<sup>24)</sup>が密かに出版されている。この作品集は1553年の作品集に収録された全ての作品に加えて最後に2編(アナクレオン風のオード、妻殺しの夫を暗示したソネ)が新たに加えられた形になっている。この出版物は、ロンサールの意図による出版なのか否かの決定的な決め手のないまま今に至っているが、1585年の末にこの世を去るロンサールは、果たしてこの出版物に対していかなる感慨をもったのであろうか。ジョデルはすでにこの世になく(1573年没)、ミュレはロンサールの死と同年の1585年ローマで客死、パイフは1589年、ヴァロア朝最後の王アンリ3世と相前後して世を去る。

最大の文芸擁護者であり武勇に優れたフランソワ1世(1547年没)の時代に成長し、その雰囲気の覚めやらぬ1550年代初頭ならいざしらず、あとを嗣いだ武張ったアンリ2世(ノストラダムスが予言したといわれる例の術術試合で目に怪我をして死んでしまうような王である)の治世では、古典の学識に裏打ちされたロンサールの難解な詩風も長くは続かなかった。その反動か、ロンサールはアンリ2世の息子シャルル9世に熱意をもって文芸指南をほどこすが、シャルル9世は彼の良い弟子となったものの軟弱な性格で、遂にはサン・バルテルミーの虐殺(1572年)という悲劇を起こしてしまうのは皮肉なものである。ロンサールの死後まもなく、ブルボン朝の17世紀がやってくる。ボワローの言うようにマレルブの登場となる。

彼(マロ)に続いてロンサールはまた別のやりかたで  
すべてを律するかに見えつつも滅茶苦茶し、自分勝手な詩法を  
つくりあげたのだが、長きにわたって幸運な運命をたどった。  
ところが、次のの世代になると、その仰々しい言葉を並べた学者もどきの  
こけおどしが、  
数奇な巡り合わせで失墜するのを彼の詩神は見るようになった。

[ ..... ]

遂にマレルブがやって来た。そして、フランスではじめて  
詩に正しいリズムを感じさせるようにし、

[ ..... ]<sup>25)</sup>

24) *Liuret de folastries. A Ianot Parisien. Plus, quelques Epigrammes grecs : et des Dithyrambes chantées au Bouc de E. Iodèle, Poète Tragiq, s.l, s.n, 1583.*

25) « RONSARD, qui le suivit, par une autre méthode, / Réglant tout, brouilla tout, fit un art à sa mode, / Et toutefois longtemps eut un heureux destin. / Mais sa Muse, en français parlant grec et latin, / Vit, dans l'âge suivant, par un retour grotesque, / Tomber de ses grands mots le faste pédantesque. / [...] / Enfin MALHERBE vint, et, le premier en France, / Fit sentir dans les vers une juste cadence, [...] » (Boileau, *L'art poétique*, chant I, v.123-132.)

以前にも指摘したように<sup>26)</sup>、ネルヴァルは「ロンサールはいわばラテン的というよりギリシャ的だった。それこそが、彼の詩派とマレルブの詩派が袂を分かっ点である<sup>27)</sup>」と述べている。ロンサールの最初の『恋愛詩集』出版から数えて丁度300年後に発せられたこの慧眼に満ちた言葉にはいまさらながら恐れ入るものがある。

(D. 1985、大阪大学助教授)

---

26) 岩根 久「サント＝ブーヴ『16世紀フランス詩及び演劇の歴史的批評的展望』の周辺」『ロンサール研究』(ロンサール研究会), VI, 1993, p.35 参照。

27) « Ronsard a été généralement plutôt grec que latin, c'est là ce qui distingue son école de celle de Malherbe. » (« La Bohème galante », V, Chap.VII : *L'Artiste*, le 1<sup>er</sup> Sept. 1852, 5<sup>me</sup> série - tome 9, p.35.)